II 退官にあたって

私のこれからの霊長類研究

川村俊蔵

己れの過去についてあまり関心をおぼえない私にとって，退官という区切りに改めて書くこととといえば，やっぱりこれからさきのことになってしまう。

とはいうものの，霊長類学に足を踏み入れた当初の意図は変わっていない。それは京大の学生時代であるが，動物の社会生活の詳細な解明が、人間の未知の部分の解明に必ずつながるだろうと考えたからである。戦争とそれにつづく時期の体験にさいなまれた故の発心であった。当時は動物社会学という言葉さえ使われず，見るべきものは昆虫社会の研究くらいのもので，高等動物に関する文献は数えるほどしかなかった。個体識別下の長期トレースという今西流手法によって開かれはじめた新しい分野は，まことに新鮮であった。そしてこの新鮮さが，最近の自然ブームにあおられつつ，いよいよたしかな流れを形成してきた。しかしこの新鮮さやブームに乗る気持ちはさらさらなかった。異様な体験からくる心の飢えが私を駆りたてる一方，表面から見えない基礎工事のようなものにかえって興味をひかれた。学者に求められる論文という製品の作製には熱心になれなかった。顧みればあの混乱期から，未だに脱してない私を見るのである。

私が運命的に結びつけられている動物社会学，人間をも含む意味ではナチュラルソシオロジーともいうべきものは，複雑な構造物を扱うものである。この構造は下等な動物ではかなり単純であるが，高等動物では複雑であり，人間ではあまりの複雑さの故に直接の解明はまずあきらめた方がよいくらいになっている。その根幹をなすのはそれぞれの種族的特性であるが，この種属的特性は，進化の歴史のなかで育った，それ自体が複雑な構造物である。生理的・形態的・生態的・行動的などの諸要素・諸条件がからみあいつつ，途方もない時代をへながら形成されたものである。この基本社会構造を私はその種族の社会性と呼ぶが，それぞれの現実の場でむき出しのまま見出されるものではない。場の生態的条件，群れの歴史，個体性，育ちのちがいなどが，これまた社会性とからみあって複雑な構造をつくる。それは単なる要素間の相互作用ではなく，要素間の歴史的因縁まで含んだ甚だとり扱いにくいものである。私は常にこの複雑な存在に畏怖を感じ，ひたすら心を無にして対象，サルならサルに教えられることを願うのである。よく研究会などで，若い人が単純な機能的連関で現象を解釈するのを見ると，恐れを知らぬものだと思う。日本人はまだしも，西欧人は一般に機能的連関をやたらにふりまわすことが多いと思われる。そしてそのような文献を読むことにより，日本人までが感化を受けているのではあるまいか。

私が育った日本の土壌は，東洋的な総合的理解法である。それは研究発表のさいに，よいモノグラフの形で出版することと対応する。周辺条件を含む詳細な記録が，構造の理解を助けるのである。今日このようなモノグラフは影をひそめ，テーマ主義や要点抜粋の短論文がほとんどである。モノグラフは労力も費用もたいへんで，非現実だとする意見が大勢を占めるようだが，私はあえてこのことに挑戦しはじめたし，今後この点で人に譲る気は毛頭ない。霊長類社会学の本筋を守る道だと考えている。

つぎに述べなければならないのは比較学という方法についてである。これまでの霊長類社会学は，野球に例えると，1回の表を終わったところのような気がする。それはまがりなりに比較学であったし，霊長類社会の諸類型とその分布を大づかみにし，外縁のひろがりを示したように思われる。しかしそれはまだ本来の比較学にはなっていない。早い話が，形態や生化学の方面からニホンザルにもっとも近い仲間とされるタイワンザルについて，何故かニホンザルと比較するに足る社会学的資料はまだえられていない。ニホンザルですでに証明されている種内比較の必要性はさておいても，比較は現存する系統上最近距離の種間において，まず行われねばならないのである。現存種の少ない大型類人猿では，この比較は思うにまかせられないが，種数の多いマカク類，ラングール類などは，比較学を展開するにもってこいの対象である。そ

れがこれまでなおざりにされていた。

定年になるしばらくまえから，ほぞを固めての近縁種間比較を，今述べたふたつのグループについて開始したのだが，それはまだ緒についたばかりである。タイワンザルに関しては，小型群しか残存しない墾丁，調査の難しい知本の他に，現存するものとしてはもっとも本格的で効率のよさそうな研究候補地，大平山がみつかった。今年はこの地での長期研究の基礎固めの年と考えている。

つぎの計画として私が狙っているのは，スマトラでのラングール類，マカク類の研究である。これまでの地固めが功を奏して，もしこの計画が実現すれば，私は果報者であろう。既設のスマトラ自然研究室が拠点になるし，インド洋上のメンタウェイ諸島などの属島を含めると，スマトラには少なくとも15種，ツパイ類を含めると20種以上の霊長類がいて，その多くで近縁種間の比較が可能である。スマトラ本土の3種のクロカンムリ系ラングールについては，すでに研究の第一ラウンドが終わったが，さらにひかえるメンタウェイヤセザルは，ラングール類において，これまでにわかった唯一のペア型社会の保持者である。社会性の進化の上での位置づけを中心に，一層精密な研究を待ちわびるかのようだ。もう一種いるパガイザルもマカク類中のブタオザル系統の比較研究の，いわば要に当たる位置を占める。

スマトラでの霊長類社会研究は，種間比較にとどまるものではない。例えばスマトラ本土産のクロカンムリヤセザルたちは，実に微妙多彩な種内変異を生じており，まるで種形成の現場に立ち会う感がある。社会性のあらすじについては，この変異に関係なく斉一性があるが，行動型，音声などの部分構造については，なお比較が必要である。メンタウェイ産になると，約25キロの海峡を隔てたふたつの島で，亜種のちがいだけでなく，行動型・音声はむろんのこと，社会性そのものにも変化があると考えられる。種内問題ではなくて，種グループ間，あるいは亜属や属の間，つまり種より大きな系統間関係をとりあげることにも，すでにあるていどとっかかりを見つけている。

可能な限りモノグラフにしてまとめるべき，このような多くの種内・種間研究をおし進めることは，とても私個人の力で行いうるものではない。それには仲間が必要であり，これまでもそうであったが，インドネシアや台湾の研究者との協力がいよいよ必要とされる。

モノグラフ的研究を強調したため，トピック的研究を軽んじたように見えるかもしれない。決してそのように考えるわけではないが，トピックは研究者が頭の中でひねりだすものではなくて，現象そのものを見ているなかでヒントを発見するのが本筋である。さきにも述べた現象への畏敬は，生命現象を扱うかぎり，基本的に必要な態度と思われる。私の例を挙げると，たとえば家系と順位との関係の発見である。他人の論文に啓発されてヒントを得ることもあろうが，他人の頭を通ったものには，思わぬおとしあながありうることを感じる。ひたすら対象そのものを師とする態度，現象への密着を，私はこれからもつづけてゆきたい。そしてここにやはり，モノグラフ的研究の土壌の上にトピック的研究も開花することを強調したいのである。

このような現場への密着を，体のつづく限りつづけてゆき，これまでとは違う一回裏の攻防を，霊長類社会学の歴史に刻む，すくなくとも導入部分をつくるというのが，私の当面の目標である。しかしこのことは，私にとって悩みの種でもある。当初に述べた心の飢えは，今以て私に迫っており，私なりに発意した動物社会学と人間社会との関係について，決算報告書を出さなくては，私も死ぬに死にきれない心境である。一方，ことの重大さが，私をこれまで寡筆にし，今西師匠の言を借りると，あいつは二度人生が要るといわれる始末である。ここで研究の現場に入るか，書斎での沈潜に移るか迷っての選択は，やはり当面フィールドをつづける方向であった。サルを相手にもう一枚ベールをはぐ努力をすることから，生涯の目標への効果が生まれる予感が私にあるからである。

いろんなところでいろんな目にあいながらも，大きな病気も怪我もなく，これまでやってこれた。この強運をなおも信じ，途中で討ち死にすることなく，当面のそして生涯の目標に立ち向かってゆきたい。この定年退職研究者に，今後とも御支援を賜わらんことを，つつしんでお願いする。

雑感

河合雅雄

いよいよ部屋を明け渡す段になって整理にかかりはじめた時，何度か茫然となって本棚の前に立ちつくした。城を明け渡すといった悲壮感や感傷からではない。膨大なファイルの列と，簡単にはかたづきそうもない書類の集積が，手と心をこまねかせたのである。夢の島に送り茶毘に付せば，という声も聞こえたが，そうするにはあまりに多くの過去の夢を閉じこめた残骸であった。それらは霊長類研究所の歴史に参加した，個人の歴史を封じこめた遺物に他ならないからである。

しかし，研究所創設初期と海外調査関係以外の書類は，全て棄て去った。創設されてすでに20年，霊長研はエスタブリッシュされ，十分に機能している今，残す必要性も何らの未練もない。ただ一つ気がかりとして残ったのは，アリ塚のごとく営々と書類を積ませた会議という所業についてである。そのために，この20年間私はどれほどの時間を費したことだろうか。

私はその行為を悔いているのではない。民主的な営為の中で研究体制を整え，活力を高めていくためには，致し方がなかったことだと思う。だが，所の運営が軌道に乗った今後は，会議にさくエネルギーを可能な限り研究に注ぎこむべきではないかと思うのである。

霊長研の特色として，協議員会を中心とした所の運営，ホミニゼーションを高くかかげた研究目的，活発な海外調査，乏しい予算を最大限に活用した共同研究推進の努力を私はあげたいと思う。教授会が無く，教官全員によって構成される協議員会が最高決議機関であり，人事は常に公募という運営体制は，全国でもユニークなものであろう。私はこの方式は誇ってもよいと考えているが，一方，この方式によって生ずる弊害を，極力押さえる努力がなされるべきではなかろうか。この方式が持つ弱点は，各種委員会の増加と多量に発生する雑務である。これに要する時間を軽減し，研究アクティビティーを高める工夫が，そろそろ積極的になされてもよいのではないか。例えば，助手の半数は一年間委員を休むとか，同一人が二つ以上の委員を兼ねないといった方策である。そのために雑務処理能力は低下するだろうが，致し方がないと割り切ることが大切だと思う。

霊長研の創設当時から，この研究所の特色を出すためには，活発な海外調査こそ最も重要であると考えていた。戦後霊長類学は，世界に先駆けて日本で起こったことは周知のことである。それは今西錦司先生の主導による生物社会学に基礎を置いた，霊長類の生態進化と社会進化を中心に，独自の発展を遂げてきたホミニゼーションへの道である。この伝統的基盤の上にたって，野外研究を押し進めることこそ，日本の霊長類学を特色づけることができると信じたからである。

この見解は，初期にはしばしば実験系の人たちからの誤解を招いた。しかし，野外研究の推進という旗印は，実験系の研究を圧迫したり，ましてや否定することにはつながらない。それは生物は生命を持ち生活をしている存在だという認識の下で，いかなる研究も実践されるべきだという原則の提唱である。そして，霊長類の自然生活の中から，新鮮なデータやアイディアを求めてほしいという期待の表明に他ならない。

在職中，私は海外調査の実行に全力を注いだ。所長職にあった4年間にも，必ず規定一杯の期間海外に出させて頂いた。このために皆さんには多大の御迷惑をおかけしたが，深い御理解を頂けたことを今更のように感謝している。幸い，実験系の人たちも，自ら積極的に野外調査も行われ，すばらしい研究成果があげられている。このことは十分世界に誇るに足る業績だと思う。

ただ残念なことには，野外調査に対する行政当局の理解が十分ではなく，また財団による支援体制は欧米諸国に比べて著しく劣勢である。とくに長期継続研究の劣勢なことは，Primates eyesを見ても一目瞭然である。こうした現状を直視し，野外研究の遂進に絶えざる努力を払い，霊長研の独自性を一層高めて頂くことを切にお願いしたい。そして，フィールド系と実験系の両研究の密着した共同研究による，独創的な研究成果が実ることを強く期待している。